

文学とは何だろうか？

伊藤直哉

(序)

私の専門は中国文学である。少くとも、勤め先から与えられている職務は「中国文学の教師」である。ところで中国文学も文学の一部であるから、今回「文学とは何か？」と考えてみた。自分が教えているものが何であるかを知っている方が、知らないよりはイイに決まっているはずだし。それで私なりに考えてみたのだが、結論としては「文学は定義できない」と言わざるをえないようである。その理由については、(本論)で述べよう。

ところで「文学は定義できない」が結論では、何だか情ない話だと思われるかもしれない。しかし角度をかえれば、「あまりにも豊かな世界なので定義できない」とも言えるわけである。私としては、文学という豊かな海原を(その片隅でもいいから)今後とも泳いで行きたいと思っている。

(本論)

まず「文学」という語について、辞書ではどう説明しているか見てみよう。手元の「広辞苑」(第五版)には次のようにある。

【文学】①学問。学芸。詩文に関する学術。②(literature) 想像の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品。すなわち詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆など。文芸。③律令制で、親王家に

官給された家庭教師。④江戸時代、諸藩の儒官の称。

さて、私が辞書で「文学」という語を調べてみたのは、今回が初めてである。なぜ「初めて」かと言うと、「文字」はごくありふれた単語だし、何となく意味が分かるような気がして、わざわざ辞書を引くまでもないと思っていたためであろう。だから改めて「文学」の定義を見て、「へえーっ」と驚いてしまった。こんなに色々な内容が含まれていたとは、まったく思いもよらなかった。

この驚きは、かつてパラパラと辞書をめくっていて「東京」という語が目に入ってきた時にも匹敵する。その辞書とは「大漢和辞典」なのであるが、そこには全部で九つの東京が出ていた。九つのうち一番古いのは、後漢の都である洛陽を指すというもので、今から約二千年前に現れた言い方である。逆に一番新しいのは、日本の首都を指すというものである。——ふだんごく普通に使っている「東京」という語も、実はこんなに複雑なものだったわけである。

ところで「広辞苑」の説明のうち、「③律令制で、親王家に官給された家庭教師」と「④江戸時代、諸藩の儒官の称」の二つは、今回考えている文学から除外したい。なぜなら、この二つは「人間の職称」だからである。一方、今考えている文学は、思うに「人間が作り出す何か」を指すものである。決して「人間そのもの」を指してはいない。

もちろん、いわゆる文学を味わっていると、目の前に作者が（つまり人間そのもの）が現れたと感ずることがある。たとえば「徒然草」の第十三段には次のようにある。

ひとりともしび燈のもとにふみ文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわぎなる。(ひとり明かりの下で書物を開き、過ぎ去った時代の人々と友だちになるのは、まことに楽しいことである。)

この記述は、いわゆる文学の妙味を言い尽くしている。しかし、「文学とは人間そのものである」としてしまうのは、やはり不適切である。「読んだ結果として人間が現れてくる」のであって、最初から人間そのものを見せて「ほら、文学とは、こういう人間のことでしょ」と言うのは、どう考えてもおかしい。ゆえに「広辞苑」の説明のうち、③と④は除外したいわけである。

そうすると残るのは①と②である。もう一度、書き写してみよう。

①学問。学芸。詩文に関する学術。② (litarature) 想像の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品。すなわち詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆など。文芸。

このうち②は「いわゆる文学」であり、普通われわれが文学と呼んでいるものである。では①の文学はどうか。①の定義によれば、文学は「学問、学芸」を指す。となると、「ははーっ、そうでしたか」と恐縮してしまう。なぜなら、「広辞苑」という権威ある辞書の定義によれば、私が書いているこの文章も「文学」になるわけなので。この私の文章は、まあ一応「論文」と言えるだろう、レベルは低い。何はともあれ、「論文」は学問の構成要素だから、この文章も「文学」だったわけである。で、そうすると、大学図書館の本も、その大きな部分がこの意味での「文学」に入ることになる。だから、次のような会話も十分に成り立つのである。

学生：「ワタシ心理学をやってて、文学にはあまり興味がないんです。」

教師：「いやいや、君が読んでる心理学の本は学問の本だから、文学に入るのさ。びっくりしたかい？ 権威ある辞書では、文学についてそう定義してあるよ。」

ところで①の定義は「学問。学芸」の後に「詩文に関する学術」が付け加えられている。前者を A、後者を B としてみよう。そうするとこの定義は「A のう

ちBであるもの」とも解釈しうる。つまり学問のうち「詩文に関する学術」のみを指す、という意味になる。しかし、これはあくまでも解釈の一つに過ぎない。AとBは両立する関係にある、とも解釈しうるのである。要するに、①の文学は学問のことであり、その一つとして「詩文に関する学術」がある、と言えるだろう。

学問の範囲は実に広い。たとえば生物学も、もちろんその一部である。さて、最近話題になった生物学の本に、福岡伸一「生物と無生物のあいだ」（講談社現代新書、2007年）というのがある。ところで「朝日新聞」の広告（2007年9月21日）で作家の高橋源一郎氏は、この本について次のように述べている。

優れた科学者の書いたものは、昔から、凡百の文学者の書いたものより、遙かに、人間的叡智に満ちたものだった。つまり、文学だった。そのことを、ぼくは、あらためて確認させられたのだった。

私も読んでみて、高橋氏の意見に同感した。この「同感」を、これまで述べてきたことを踏まえて言い直せば、つぎのようになる。——①の文学（学問）の中には、いわゆる文学（つまり②の文学）よりも、ずっと文学らしいものがある。

「生物と無生物のあいだ」は「いわゆる文学」ではないけれど、はるかに文学らしい本だと思う。ところでこの本は、生物とは何か、という問題を取りあつたものである。ただ私見によれば、同じテーマの本としては、山口實「ミネルバの森の哲学教室」（TBSブリタニカ、1995年）の方が、更に文学的だと思う。「生物と無生物のあいだ」では問題提起に止まっていることについても、明確な答えが示されており、本当に感動させられる。興味のある方は、両方を読みくらべていただきたい。

「ミネルバの森の哲学教室」は、生命とは何かを論じた哲学書である。そして、いわゆる文学よりも文学らしい本である。こういう例は、学問の全領域にわたっ

て、数多く存在するであろう。

そこで思う。文学というのは、確かに存在する。しかし定義は難しい。極端に言えば、何かを読んで文学を感じずるならば、それが文学なのである。感じ方は、人によって様々に異なる。「十人十色」と言うけれど、「文学かどうか」という感じ方も、十人十色なのである。

話は変わるが、法学者で歌人でもあった黒田了一氏は、次のような歌を詠んでいる。

秋の夜を ひたすら学ぶ 六法に 恋という字は 見出でざりけり

この歌は、六法全書に味けなさを覚えた時に詠んだものであろうが、見方を変えれば法律こそは「ユーモア文学の宝庫」とも言えるのである。たとえば民法七九二条には次のようにある。

成人に達した者は、養子をすることができる。

まず笑ってしまうのは「養子をする」という言い方である。「予習をする」とか「ダンスをする」とは言うけれど、「養子をする」という言い方もあったとは。これぞまさしく、一つのユーモア文学である。

それから、「この条文は、どんな場合を想定しているか」と考えると、よけいにユーモラスである。頭に浮かんでくるのは、次のような場面である。

高校生の息子：「とうちゃん、オレ、養子をもらいたいんだ。」

父親：「いかんいかん、お前はまだ未成年だぞ。」

世の中は広い、こういう「ブツとんだ」子供も中にはいるかもしれん、と熟慮

して制定されたのが民法七九二条なのであろう。——そう考えて行くと、法律はユーモア文学の宝庫だと言える。法律に文学を感じても、一向に構わない。先に述べたように、「文学かどうか」を決めるのは、個々の人間の感覚なのであるから。

感覚は自由である。みんなそれぞれ自由に文学を見つけて良いのである。だから、「小説や詩」という「文学らしい文学」だけが文学なのではない。

ここで「広辞苑」の文学の②に関する定義を、今一度見てみよう。

② (literature) 想像の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品。すなわち詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆など。文芸。

「想像の力を借り」と言っている以上、ここでは「フィクションとしての文学作品」が念頭に置かれている。この定義は一応の目安にはなりうるが、実際には、定義の枠からはみ出てしまうものが多く存在するのである。たとえば漢代の歴史を記した「漢書」、これなどは歴史書であろうか、文学書であろうか。答えは簡単である。文学だと思えば文学なのである。私は、「漢書」は歴史書であるとともに文学書でもある、と思う。ところで実は、「漢書」を文学と見るのは、私個人に限ったことではない。夏目漱石の「文学論」の序には、次のように述べられているのである。

余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢（～～「春秋左氏伝」「国語」「史記」「漢書」のこと）より得たり。

漱石が「文学」だとしている四つの歴史書は、「中国文学史」（前野直彬編、東京大学出版会、1975年）でも、文学史の重要な作品として取りあげられている。となると、「広辞苑」で言う「想像の力を借り」については、「そうとは限らない」と言うべきである。何せ歴史書も文学であると、複数の人間が判断しているわけだから。もちろん、歴史書の中に伝説的な要素が含まれている可能性はある。し

かし書いた人たちは、あくまでも「これは事実である」と信じて記しているのである。なお中国文学では（特に近代以前においては）、事実を描写することに重点が置かれていた。このことは、高名な中国文学者である吉川幸次郎氏が、その全集の中でくり返し述べている所である。

次には、文字の横に絵が付いたものは、文学であるかどうかを考えてみたい。私は、それも文学だと思う。そう考えないと、御伽草子^{おとぎぞうし}は文学ではなくなってしまふ。御伽草子は室町時代から江戸時代にかけて書かれた小説であり、日本の古典文学として認められている。そして、絵が付いている。御伽草子の中の「十二類絵巻」というのを見てみよう。これは簡単に言うと、十二支には入らない狸を、十二支の生き物たちがイジめる、という話である。登場する生き物たちは、みな人間のように着物姿である。着物姿の鶏が狸に向かって片足をあげている絵では、その横に「けふせてくれむ（蹴り倒してやるぞ）」という鶏の言葉が記されている。写真版でこの御伽草子を見ていると、「まるでマンガだな」と思う。少なくとも私には、御伽草子（という古典文学）とマンガとを、決定的に区別する要素は見出せないのである。

ここで発想を転換するならば、「マンガも文学である」ということになるろう。そう考えても、全然おかしくないのである。マンガの地位は年々上がってきており、マンガ学科を設けている大学も複数ある。それだけの存在になったのだから、この辺で「マンガは文学の一環である」と宣言してもいいんじゃないか、と思う。そうすると「文学の愛好者」も、一挙に増えることになるわけだ。

文学は絵と一体になっていても構わないわけだが、文字は、必ずしも必要ではない。世界には多くの口承文学^{こうしょう}（音声によって語りつがれる文学）が存在する。また、中国最古の詩集である「詩経」^{しきょう}も、もともとは文字で書かれたものではなかった。「詩経」の作品は、本来は祭りで歌われた歌謡であった。そういう歌謡が、中国文学史における重要な作品となったのである。

そうなると、今のミュージシャンたちの歌も、「詩経」と同じく文学作品と見

なすべきである。それから、CDで歌を聞くことは、立派な「文学鑑賞」と言える。また、自分で歌を作って歌っている人が（特に若い人には）多いが、彼らは文学を創作しているのだ、と見なすべきである。

文学に文字が必要とは限らない、というのは、戯曲の場合にも当てはまる。シェイクスピアの戯曲は、目で読む時だけ文学で、舞台上で演じられたとたんに、文学ではなくなるのだろうか。そんなことは、ありえない。だから、すべての演劇は文学なのである。また、映画（アニメを含む）やTVドラマなども、演劇と同様に文学である。

以上のように考えて行くと、「文学の不振」というような言い方が、いかに^ま的^と外^{はず}れであるか分かるだろう。文学は、今日でも「不振」なのではない。狭義の文学（小説や詩）が不振だけで、広義の文学（マンガ、歌、映画、アニメ、TVドラマなど）は、今まさに盛んに花開いているのである。

さて今度は「古今集」の^{きのつらゆき}紀貫之の和歌を見てみよう。

山ざくら 霞のまより ほのかにも みてし人こそ こひしかりけり（霞の
間に見え隠れする山桜のように、ちらりと見えた^{あなた}貴方が、恋しくて恋しくて。）

^{ことばがき}詞書（和歌の説明）によると、この和歌は次のようにして作られた。——紀貫之は、ある日外出して、女たちが花を摘んでいるのを見かけた。その中の一人に恋心をいただき、後で和歌を作って贈った。

要するに、この和歌は言わば「告白メール」ではないか。と同時に、「古今集」という立派な古典文学に収められてもいるわけである。この和歌に限らず、「古今集」には「告白メール」的なものが数多く見られる。

ところで私は、ケータイのメールはやらない。ケータイを持っていないので。しかし^{そくぶん}仄聞する所では、メールは単に実用に供するのみならず、様々な胸の思いを訴えかけることも多いらしい。ならば「古今集」と同類ではないだろうか。違

いは、片やは紙と筆、片やはケータイという道具だけなのである。

まあ大多数のメールは、(おそらく)紀貫之の和歌のような五七五七七といったリズム感はないだろうし、言葉の選び方も雑であろう。つまり、文学的レベルは低いだろう。しかし、やはり文学なのである。

これまで述べてきたことを、まとめてみよう。文学とは、人が文学だと思うものである。その範囲はまことに広く、メール、歌、マンガ、演劇、映画、アニメ、TVドラマ、歴史書、六法全書、様々な分野の学術書、和歌、小説、詩などなどがある。おそらく、文学なしには人間は生活できない。逆に言えば、人間にとって文学とは、必要不可欠なものなのである。

ところで私としては、より多くの人々が「いわゆる文学」にもっと触れる方がいいと思う。気合いを入れて読めば、面白いと感ずる作品は多いはずだし、それによって「文学全体のレベル」も向上するだろうから。もちろんこれは、あくまでも理想である。しかし、人間たるもの理想を見失ってはいけない、とも思う。

(結語)

以上(本論)では「文学とは、人間が文学だと思うもの」と述べた。これは要するに、「文学は定義できない」ということである。そして「定義できない」とは豊かさの代名詞みたいなもの、と考えられるだろう。

さて、これまでの叙述において、断りなしに前提としてきたことがある。その前提とは、「何らかの形で言語が用いられていること、それが文学の条件」というものである。「広辞苑」にも「言語によって」と記されているし、まさか「言語を用いない文学」というものは考えられないだろう。ところが、ファッション

デザイナーの山本耀司氏は、次のように述べている。

僕はファッションを手段にして文学をやっているつもりです。（「朝日新聞」
2007年11月10日）

うーん、ファッションも文学だとなると、「言語のない文学」もありうることになる……。これは大きな問題なので、そのうち機会があれば、また改めて考えてみたい。